

國營伊那西部農業水利事業

南村遺跡緊急發掘調查報告書

伊那市教育委員會

關東農政局伊那西部農業水利事業所

## 序

南村遺跡は古くから多くの遺物が出土すると、地域の耕作者達が言ひ伝えてきた。昭和五十三年に伊那西部の土地改良事業が実施されることで、第一次の緊急発掘調査が取り行われた。この調査によつて、始めて学問的に取りあげられ、伊那市を代表する遺跡となつた。

第一次緊急発掘調査の結果は次の通りであります。縄文早期終末期から繩文前期初頭の竪穴住居址六軒、平安時代の竪穴住居址三軒、昭和六十年七月二十六日、関係者の協議により、該当地区埋蔵文化財の発掘調査計画が打ち出された。友野良一先生を調査團長に、地元の考古学研究者のもとに、十月二十八日～十一月十四日まで発掘調査が実施された。限られた範囲の調査であったので、当初期待していいた程の調査成果は得られなかつたが、本遺跡の範囲を把握するのに有意義であつた。

本発掘調査事業を進めるにあたつて、関係各位の並々ならぬ御協力のもとに極めて順調にことを進めていただき、また、現地作業後の遺物の整理、研究、報告書作成には御労苦を頼つた。かくて、この事業が関係各位の絶大なる御協力によつて今日の成果を得たことに、心から感謝致す次第です。

昭和六十一年三月

伊那市教育委員会教育長

伊沢  
一雄

## 凡例

一、今回の緊急発掘調査は西部開発に伴う、西部送水管事業で、第六次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。  
二、この調査は、西部送水管事業に伴う緊急発掘で、事業は関東農政局伊那西部農業水利事業所の委託により、伊那市教育委員会が発掘調査團を結成して実施した。

三、本調査は、昭和六十年度中に業務を終了する義務があるため報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆすることにした。

四、本文執筆者は次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

### ◎図版作製者

○遺構及び地形実測図 飯塚政美

○土器拓影 飯塚政美

○石器実測図 飯塚政美

### ◎写真撮影

○発掘及び遺構 飯塚政美 友野良一

### 五、本報告書の編集は主として伊那市教育委員会内伊那市遺跡調査團があつた。

六、出土した遺物や遺構・遺物の図面類は伊那市考古資料館に保管してある。

## 一 発掘調査の経緯

西部開発事業の一環として、竜西地区に送水管を農林水産省直轄のもとに付設する計画が実施されて徐々に工事が進むようしている。

伊那市においては、西箕輪、西春近、伊那地区がこれに該当し、昭和五十年度に西箕輪大泉新田塚遺跡、昭和五十四年度に西箕輪羽

広財木遺跡、金鋸場遺跡、昭和五十五年度に西箕輪上戸宮塚外遺跡

西箕輪中条天庄II遺跡、堀の内遺跡、小花岡遺跡、昭和五十五年度

に西箕輪吹上桜塚遺跡、昭和五十七年度に伊那船塚遺跡、西町区大坊城塚遺跡、西春近山本城平塚跡、宮林遺跡、山の根遺跡、昭和五十八年度に西春近宮の原大境遺跡、中原遺跡、西春近細ヶ谷細ヶ谷B遺跡、昭和五十九年度に西春近白沢名廻遺跡、東春近木裏原北丘B遺跡、西春近柳沢柳沢遺跡、西春近井の久保山の下塚跡の緊急発掘調査を行つた。

昭和六十年四月二十六日 長野県教育委員会文化課大田、芦部両指導主事が来伊し、伊那市教育委員会社会教育課職員、関東農政局伊那西部農業水利事業所職員と三者協議を混じながら予算査定を行つ。

昭和六十年七月二十六日 柳沢会所で夜、地権者と打ち合せをする。伊那市教育委員会社会教育課職員と関東農政局伊那西部農業水利事業所職員が出席する。

昭和六十年九月六日 伊那市長と関東農政局伊那西部農業水利事業所長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し

昭和六十年九月十八日 伊那市教育委員会社会教育課職員が地権者（北原一喜、平沢孝行兩氏）宅を訪問し、発掘承諾書に署名、捺印をしてもらう。

## 二 調査の組織

### 南村遺跡発掘調査会

#### 調査委員会

委員長 伊沢一雄 伊那市教育委員会教育長  
副委員長 北村 誠 伊那市文化財審議委員会委員長

委員 山口 育 伊那市教育委員会委員長  
調査事務局 村山幸義 伊那市教育委員会教育次長

監視人 横沢典人  
柘植晃  
宮原強  
飯塚政美  
社会教育課長

高木いすみ  
御子柴泰正  
根津清志  
長野県考古学会会員  
課長補佐  
係長

主事

発掘調査団

高木いすみ 日本考古学協会会員

長友野良一 日本考古学協会会員

調査員 福沢幸一

高木いすみ 日本考古学協会会員

根津清志 長野県考古学会会員

御子柴泰正

日本考古学協会会員

坂塚政美 日本考古学協会会員

小池孝一 酒井岩夫 池上大二 三沢寛 大野田英 大野

田三千代、埋橋三、酒井とし子、柴佐一郎、北原一喜、大久保富  
美子（敬称略順不同）

### 三位位置

南村遺跡は長野県伊那市西春近柳沢に所在している。本遺跡は藤沢川に面した位置（柳沢部落の南端）にある。かなり広範囲の遺跡面積を有しているが、今回の対象となつたところは二〇〇坪と狭い範囲であった。現況は山林、桑畑、水田として利用されている。このうち水田化されているところは大部分、すでに土地改良事業が完了している。標高は六七〇m、六九五m位である。

南村遺跡までの経路は国鉄飯田線藤沢駅で下車し、国道一五三号線を南へ向って徒歩で十分程行くと、伊那バス柳沢入口の停留所がある。この停留所の北側に流れている川が猪の沢川である。停留所付近を左折してグラグラ坂を登つて十五分程徒歩で行くと柳沢部落である。この部落の南端、藤沢川の北岸一帯が南村遺跡である。

### 四 地形・地質

伊那市西春近地区の地形・地質の成因を大別してみると次の三つが考えられる。一、天竜川、三峰川等々によって形成された冲積水面、一、天竜川及び天竜川の支流（北から小黒川、戸沢川、小戸沢川、大田切川、猪の沢川、大洞、前沢川、藤沢川、堂沢川、大沢川）によつて形成された河岸段丘面（いわゆる洪積世台地面）、一、木曾山脈の前山である権現山より展開する山麓扇状地面。

南村遺跡はローム層までは深く、表土面から一四mを越していた。  
南村遺跡に大きな影響を及ぼした藤沢川水系について「伊那市史自

然編」より記すと次のようになる。「伊那市の南部地域にある河川で、木曾山脈オツ起に発し、流域は非常に小さく、支流がごくわずかである。流路距離もみじかく、こう配も急傾斜で、流量・流速の変化もはげしい。水害の危険が内在していると考えられる」

今回、発掘調査を実施した地点は藤沢川北岸に該当し、低位段丘面上に含まれていると思われる。藤沢川の河床から低位段丘面までの比高差は五m位あつた。

標高(m)	仰角(度)	傾斜(m)	土質記号	土質名	色調	風土記事
691.43	0.00					
690.88	0.55	0.55	X	土 黒褐色		8.10m、東に草叢生る低地土よりなる。北側、戸沢川河床の北側に位置する。土色は黒褐色で、土壌構造は良好である。土質は粘重である。
689.56	2.35	1.80	O	一 ぬき	ぬき	8.10m、東に草叢生る低地土よりなる。北側、戸沢川河床の北側に位置する。土色は黒褐色で、土質は粘重である。
686.36	5.17		○○○○	玉砂利り砂層	茶灰	8.10m、東に草叢生る低地土よりなる。北側、戸沢川河床の北側に位置する。土色は黒褐色で、土質は粘重である。
685.00						
683.75						
682.50						
681.25						
680.00						
678.75						
677.50						
676.25						
675.00						
673.75						
672.50						
671.25						
670.00						

第1図 南村遺跡付近の土層柱状図

## 五 周辺遺跡の分布状況

西春近中・南部地区で現在確認されている遺跡は四十九カ所を数える。これら四十九カ所の

遺跡のうち八割はすでに諸開発によって破壊寸前に直面していたので、数多くの

緊急発掘、調査を十数年間にわたって実施してきた。その結果、これらの遺跡の時代的内訳は先土器時代から江戸時代までの長きにわたっている。

前述した諸開発とは次のようなものである。中央自

動車道の開発、大型農道の開発、宅地造成、工業用地造成、養蚕用地造成、土地改良事業。(飯塚政美)

## 六 発掘日誌

(月) 晴 午前中は伊那市考古資料館にて発掘器材の整備を行う。午後、現地



第2図 西春近中・南部地区遺跡分布図 (1:75,000)

### 遺跡の名称

①名越西古墳	②名越東古墳	③名越南	④光 墓	⑤飯塚家西古墳
⑥飯塚家東古墳	⑦カンバ根外	⑧九 山	⑨南小出南原	⑩春野堂
⑪磯木原	⑩椿木古墳	⑩名 通	⑫北丘B	⑬北丘A
⑫北丘C	⑩南丘B	⑩南丘A	⑩南丘C	⑩根子加原
⑭山の神	⑩上の坂	⑩大曾根坂	⑩御 跡	⑩下小山原
⑮天池原	⑩南 村	⑩東 田	⑩天 仙	⑩井の久保
⑯妻木原	⑩山の下	⑩菖蒲沢	⑩富士山下	⑩富士塚
⑰広庭外I	⑩広庭外II	⑩鳥井田	⑩高瀬道	⑩西春近南小学校付近
⑲安興城	⑩城の櫻	⑩清 吹	⑩和 手	⑩上手南
⑳青人口	⑩寺 井	⑩下 牧	⑩下牧組屋	

（道具を運搬する。）

昭和六十年十月二十九日（火）

曇時々小雨

昨日、運搬した発

掘器材にもとづき、テントを現場の南側、藤沢川に面したところに建てる。

昭和六十年十月三十一日（木） 晴 本日よりグリットを設定する。グリット名は西側の用地境界線上を基点にした。基点は藤沢川に面した最も南側の用地内の一ヶ所とする。西から東へ A → C、南北から北へ 1 → 13 として市松状に掘りはじめる。基点付近のグリットより黒土の落ち込みがみられ、第一号土塁とする。全般的にローム層まで深く、一田位もあつた。わずかであつたが土器と石器片が出土した。遺構内からの遺物の出土は何もなかつた。

昭和六十年十一月二日（土） 晴 一昨日に引きつづき、グリット掘りを北へ進める。都合により作業員が三名と少なく、作業時間半日とする。

昭和六十年十一月五日（火） 晴 グリット掘りを北へ、北へと進めていくが、遺物の出土は何もなかつた。ローム層までは深く、表土層面から一田を越していた。

昭和六十年十一月八日（金） 晴 本日はグリット設定地区のうちで、北側によつたところのグリット掘りをする。遺物は相当量出土した。横円押型文土器が一点出土した。

昭和六十年十一月九日（土） 晴 本日は土曜日で、午後は作業員全員が都合があるとのことで、半日で作業を終了する。主なる作業は第一号土塁の拡張、プランを確認し、掘り下げ及び清掃をする。写真撮影、実測を終了する。

昭和六十年十一月十四日（木） 晴時々曇 北側の段丘崖面近く

の傾斜のあるグリットを掘り下げる。遺物の出土はほんのわずかであり、遺構の後出はますのぞめないと思われた。この付近も黒土層が厚く、ローム層に達するには上から 1m-20cm 程度もあつた。冬将军が近づいたとみえて、一日中荒れの日であつた。本日をもって南北遺跡の発掘を終了した。

昭和六十年十二月一昭和六十年一月 図面の整理、原稿執筆、

報告書の編集。

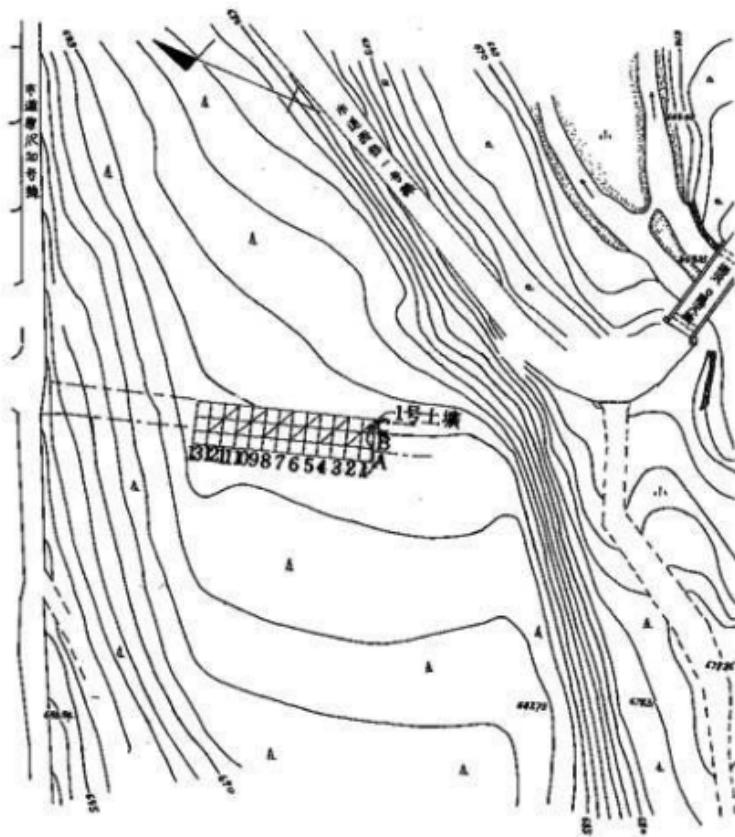
昭和六十年二月 報告書を印刷所へ送る。

昭和六十年三月 報告書を刊行する。

（飯塚政美）

幅 5m と限られた範囲の調査である。しかも、発掘実施予定地区の北側は藤沢川によって形成された左岸河岸段丘崖面になつており、従つて急傾斜の状態を呈していたために、当初より、この範囲内には、全くと言ってよい程に遺構の存在はあり得ないと思われた。

一方、南側の平坦地は藤沢川の左岸段丘崖面に、位置していることからして、遺構の存在性はかなり高いものと期待していた。昭和五十三年の発掘調査のおりに薄手細線指痕文土器を多量に出土した腰穴住居址が六軒検出された。さらに、今回の発掘調査を実施する直前の動機となつた押型文土器の出土等々の状況から察して、これらに関連した時期の遺構の検出を大いに願ひながら、十月下旬から調査にかかつた。調査を終了してみると、当初の期待を裏切ったかのように時期不詳の土塁一基と、少量の遺物の出土があつたに過ぎなかつた。



第3図 地形及び造構配置図 (1 : 1,000)

第一号土塙 (第4図、図版4)  
 グリットA1、B1にかけて検出された造構であり、いろいろの状況からしてみて、土塙と名付けるのが妥当と思われた。

表土面から六十cm位下った細礫混合のローム層を掘り込んで構築してある。表土面から造構掘り込み面までの層位は耕土は三十cm厚位、その下は黒土層三十cm厚位であった。

南北1m十cm位、東西2m四十五cm位を測り、長椿円形状の平面プランを成していた。南壁高は七十cm位を、北壁高は五十cm位を、それぞれ測る。壁の状態をみてみると次のようになる。南壁はやや外傾し、軟弱で細礫を含んでいる。北壁は外傾が強く、軟弱氣味で細礫を含んでいる。東壁はなだらかな傾斜を、西壁はやや湾曲氣味を呈している。西壁には人頭大程の石二個と多くの細礫を含んでいる。

床面はかたく、やや凹凸があり、



第4図 第1号土坑実測図

多くの細碎を含む。この面の中央部付近に南北にわずかな段がついている。覆土の上層面に少量の炭付物が検出された。  
遺物の出土は何もなかった。従つて時期は不詳である。

### 八 遺 物 (第5～6図)

(1) 土器 (第5図)  
今回の発掘調査で出土した土器は全部で三十数片であったが、その内で文様が良好な土器十五片をここに掲載した。(1～2)はどちらかと書えればやや粗大型の横円押型文であり、多量の纖維を含んでいる。色調は黄褐色(1)、赤褐色(2)を呈す。焼成は双方とも不良である。

(3～5)は器面全体にわたって、鋭い竹べらによる半削竹管文

が、斜行、横走している文様構成を主としている。色調は赤茶褐色(3～4)、明茶褐色(5)を呈し、三片とも多量の長石を含み、焼成は中位である。(3～5)は縄文前期終末期と思われる。

6～8

は外面にアナグラ属の貝殻の背によって条痕文を横走させてあり、いわゆる貝殻条痕文の一派と思われる。色調は赤茶褐色を呈し、多量の纖維を含み、焼成は悪い。茅山上層式に属すると思われる。

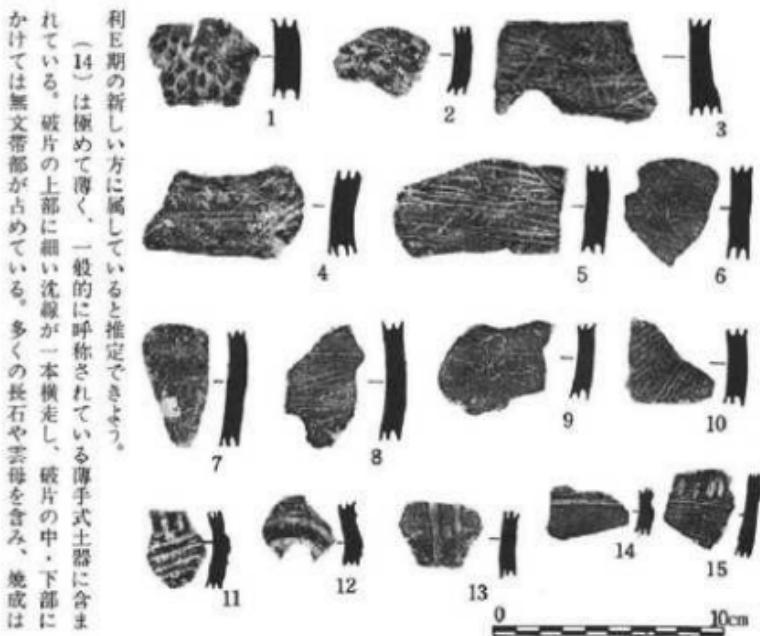
(7～9)は多量の纖維を含み、外面に乱れた斜縦文を施してあるもの。赤褐色を呈し、焼成は普通である。縄文前期前半頭の土器片と推定でき得よう。

(10)は外面に細かな斜縦文を施してある。少量の雲母を含み、茶黒褐色を呈し、焼成は良好である。諸磯系統の土器と思われる。

(11)は破片の上部に継ぎの刻目を押捺し、下部に數枚にわたつて細かな横線が横走している。かなり大きな粒の長石を含み、赤茶褐色を呈し、焼成は普通である。縄文中期初頭に編年づけられると推測される。

(12)は破片の中央部付近に低い隆帯を円弧状に貼り付け、それの上・下にヘラによる幅広ろの沈線を隆帯と同一の曲線を描きながら施してある。赤茶褐色を呈し、少量の長石を含み、焼成は良好である。縄文中期後葉・加曾利E期の土器であろう。

(13)は無文地へ幅広ろの懸垂文を垂下させてある。黒褐色を呈し、焼成は極めて良好である。加曾利E期の土器片と思われる。同じ、加曾利E期でも(12)は加曾利E期の古い方に、(13)は加曾



第5図 土器拓影

極めて良好で、赤褐色を呈す。繩文後期中葉加曾利B式に含まれるであろう。

(15)は弥生後期土器破片である。破片の上部は櫛状地文具によって施文され、それがあたかも鋸歯状のようにみえる。下部は櫛状工具による細沈線が横に走っている。赤褐色を呈し、焼成は良好、少量の長石を含む。

## (2) 石器 (第6図)

(1・3)は短闊型打製石斧である。(1)の調整は割合に難であり、従つて刃部の調整も悪い。(3)の上・下部は欠損してしまっている。刃部の調整は(1)よりも丁寧に作り出している。ともに硬砂岩を石材として用いている。

(2)は下部が張る、いわゆる撥形の打製石斧である。頭部は欠損している。石器の刃部は全縁にわたってあり、剝離は丁寧に仕上げてある。硬砂岩を用いている。

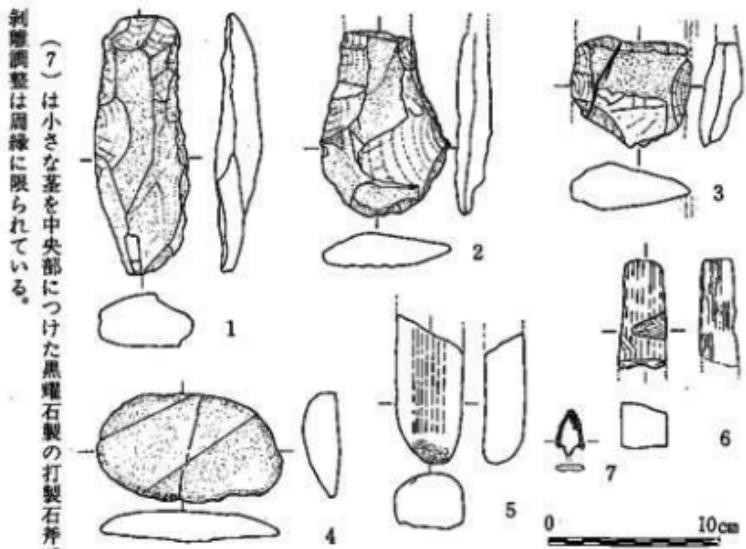
(4)は橢円形状の礫を半分に割り、その破片の下部に刃を作り出して石器として用いている。橢刃型石器と呼ばれている。石質として硬砂岩を用いている。

(5)は縞泥岩の櫛状石器であり、上部は欠損している。中央部は平坦になる程に磨いてある。頭部には若干、敲打痕が認められる。縞泥岩は三峰川水系に産出されている。

(6)は油性頁岩系の石を用い、ほぼ四面体状に調整し、砥石としての機能面を備えている。下部は欠損し、磨いた痕と、磨く時にかけては無文帶部が占めている。多くの長石や雲母を含み、焼成は

E期の新しい方に属していると推定できよう。

(14)は極めて薄く、一般的に呼称されている薄手式土器に含まれている。破片の上部に細い沈線が一本横走し、破片の中・下部にかけては無文帶部が占めている。多くの長石や雲母を含み、焼成は



第6図 石器実測図

(7)は小さな茎を中央部につけた黒耀石製の打製石斧であり、剥離調整は周縁に限られている。

### 九 まとめ

西部透水管付設工事と併行した事態で実施した南村遺跡の緊急発掘調査状況は、先に述べたとおりである。極く、限られた範囲の発掘面積であったので、ここでは、発掘調査の過程において把握した所見と問題点を記述しておくことにする。

**規模と立地**—今回発掘調査を実施した面積は二〇〇坪位であったことからして、本遺跡の南限は藤沢川の第一段丘崖面に接する地点まで広がっていることがわかった。当時の生活用水は遺跡地付近には湧水がないことからして、直接、この藤沢川の水を用いたのであろう。

**遺構**—今回の調査で検出された遺構は土塙一基だけであった。遺物が何も出土しないので、明確なる時代決定はできないが、周囲の状況、形態からして縄文期のものと思われる。

**遺物**—今回出土した土器のうちで、粗大精円押型文、茅山上層式、花積下層式は前回検出された薄手繩縄指痕文土器を出土した住居群に関連していると思われる。弥生後期中島式の土器は水田農耕に関係していると思われる。当時の水田が大部分であると言われている。従って、当時の藤沢川は氾濫度合が比較的少なく、湿地が各地に点在していたと窺い知れる。加曾利B式土器文化は一般的に流傳文化だと言われている面からみて、かつては藤沢川には多量の魚が生息していたのである。

(飯坂政美)



図版1 遺跡地を南側より眺む



図版2 遺跡地を北側より眺む



図版3 発掘調査終了後のグリット（北側より）



図版4 第1号土塚



図版 5 発掘風景



図版 6 石器出土状況



図版 7 石鐵出土状況

---

---

## 南村遺跡緊急発掘調査報告書

昭和61年3月10日 印刷

昭和61年3月15日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 はおづき書籍株式会社

---

